



Title	飼いならすことについての人間学的研究 ーベトナム 紅河デルタのドムス複合体に関する考察からー
Author(s)	住村, 欣範
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87807
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 住 村 欣 範 ）

論文題名

飼いならすことについての人間学的研究
—ベトナム紅河デルタのドムス複合体に関する考察から—

論文内容の要旨

本論文は、人間と自然との間の基本的な関係の一つである「飼いならすこと」について、ドムス複合体という概念に基づいて、ベトナム北部の紅河デルタの農村の生態系モジュールの変遷について人間学的な考察を行ったものである。考察において用いた資料は、紅河デルタで実施した人類学的フィールドワーク、当該地域に関する文献資料、および、実践的活動の記録と成果からなる。

序章では、アントロポセンと呼ばれるようになっていく21世紀において、ベトナムの紅河デルタの農家の屋敷地の菜園がその意味を変えつつも存在し続けていることについて、ベトナムと日本と世界が交錯するいくつかの事例をもつて示すとともに、本論の視野と基本的な問題系の提起を行った。

第一章では、発案者であるスコットのドムス複合体という概念について議論をもとに、本論文において基本となる2つの概念である「飼いならし」と「ドムス複合体」について自然と人間の関係について再考しながら整理した。スコットのドメスティケーションという概念が、生物学的な意味での人為的選択ではなく、人間の生活する場所への生物の集住を基本とした生態系モジュール（ドムス複合体）を意味するものであることを確認し、スコットの議論の中心にあった国家形成論から離れた一般化をするための拡張を試みた。

第二章では、紅河デルタにおいてドムス複合体が形成される諸条件について、湿地と乾地の対比を基に考察をおこなった。その結果、紅河デルタの農村に顕著にみられる2つのサブモジュールとして、稲作を中心とした極めて人工的な空間である「日向のドムス」と多様な動植物と人間との関係の複合体である「日陰のドムス」という筆者独自の生態系モデルを提示した。

第三章では、紅河デルタにおける人間と植物の関係が、稲作にみられるような高度に人為的な栽培のほか、日陰のドムスにみられる半栽培のヴァリエーションがあることを示した。また、食用・薬用植物について、紅河デルタで実際に収集した植物利用のデータを基に、人間の健康との関係において分析を行った。特に、熟／冷理論と呼ばれる二元論的な世界認識の中で、自然との関係性の連鎖の中に埋め込まれていた人間が、自然の「利用者」に変化し、自然に対して人間中心主義的な単一目的に従った関係性を結ぶことによって自然から突出した存在になりつつあることについて考察した。

第四章では、植民地支配の時代から「コメの国」として表象され、合作社においてもコメ中心の政策がとられてきたベトナムにおいて、ドムス複合体における多様性が栄養学的な視点から見直され、利用されるようになる過程で、主導的役割を果たした栄養学者トゥ・ザイの論考について考察した。また、トゥ・ザイたちが定式化したVAC複合農法がその後、自給自足と栄養の問題から離れ、「貧困」や「循環」の問題系に展開していったことについても考察した。

第五章では、日陰のドムスにおける人間の活動が形式経済とは異なるマイナー・サブシステムとしての性格を持つものであることを示した。また、社会主義に基づいた配給経済の時代において、家族の領域であった「日陰のドムス」の一部を国家経済に組み込もうとしたこと、ドイモイ政策の開始以降にVAC複合農法が市場経済に接合され、その性格を変えていったことについて、いずれの時代にも日陰のドムスで「経済」の主役となったブタの生産と消費を中心に考察した。

第六章では、筆者が参加した薬剤耐性菌に関する研究プロジェクトにおいて、紅河デルタの農村部の小規模な畜産においても抗生物質が多用され、コリスチンという人間にとっての切り札と見なされるようになった抗生物質についても、これが畜産において乱用され薬剤耐性菌が生み出され、人間にもそれが伝播し拡散している状況について記述し、紅河デルタのドムス複合体において、人間の意図と違う結果が急速に生み出され、それが社会的なものと複合していく過程について考察した。また、プロジェクトにおいて行った薬剤耐性菌への感染を減らすための介入研究が、感染の減少については有効な知見を生み出したものの、ドムス複合体における人間と生物と環境の相互作用という根底にある問題に対しては未だ理解が不十分であることを論じた。

終章においては、人口の爆発と抑制というアントロポセンの根底にあるヒトの飼いならしについて、紅河デルタの場合について考察し、新しい土地への移動と開墾から人口抑制政策（産児制限）へと向かわなければならなくなった状況について概観した。そして、ベトナムは、21世紀になって人口入れ替えに適した合計特殊出生率である「2」を維持し、一時的にヒトの飼いならしに成功しているように見えるものの、すでに、充満した地域と国家は、世界に接合され、紅河デルタのドムス複合体も、温暖化ガスの収支バランスを欠き、地域を離れたプラネタリーな問題系の中に引きずり込まれかけていることを示した。

以上の考察を通して、本論文では、紅河デルタの事例を基に単一目的に従った人為が遅延してもたらず問題群について俯瞰し、科学技術を含む「飼いならし」の限界について指摘するとともに、人間と生物と物質の3つの世界を再統合し、人間を自然に埋め込みなおすことの必要性を示した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (住 村 欣 範)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	栗本 英世
	副 査	教 授	森田 敦郎
	副 査	准教授	モハーチ ゲルゲイ

論文審査の結果の要旨

人間と自然との関係は、人文学と社会科学だけでなく、自然科学にとっても根本的な学問的課題である。それと同時に、抜本的な対応が求められている、今日的な地球的課題でもある。人間と自然との関係が具体的に表現されるのは、人間と個別の動植物種とのあいだにおいてである。人間は、約1万年前に多数の動植物とのあいだで特別な関係を結ぶようになり、その結果ヒトというひとつの種の生き物の、地球史上前例のない生息域の拡大と人口増加、そして社会の発展がもたらされることになった。この転換は、家畜化や栽培化と呼ばれている。日本語では二つの異なる語彙だが、英語ではドメスティケーションというひとつの語彙で表現される。

本学位申請論文は、家畜化と栽培化の両方を含む用語として「飼いならすこと」を用い、主としてジェームズ・スコットが近著『反穀物の人類史』(*Against the Grain*, 2017)で提起した「ドムス複合体」という概念に依拠しつつ、現代ベトナムにおける人間と自然との関係を、複合的・多元的に考察することを目的とした、意欲的で学術的に高い価値を有する研究成果である。また、本論文は、著者が過去20数年間にわたって実施してきたベトナムにおける調査研究の集大成であると位置づけることができる。具体的には、先行研究や関連研究のレビューを踏まえて、ベトナムの紅河デルタの農村地帯で見出すことができるドムス複合体を、主要な生産の場である水田から構成される「日向のドムス」と家屋敷の周囲の菜園、ため池や家畜小屋から構成される「日陰のドムス」の二つに大別して記述・分析している。次に、その知見を、植民地支配と解放闘争、そして1980年代以降の開放政策という歴史的な変化の文脈のなかに位置付けている。植民地国家、そして社会主義国家との動態的な関係の中で、ドムス複合体がどう変容してきたかが明らかにされている。最後に、社会主義国ベトナムが開放政策に転換し、農業と畜産の商品経済化が進展した結果、ドムス複合体を基盤として生きてきた農民たちが直面している今日的な問題が論じられている。それは、小規模な畜産においても生産性を向上させるために抗生物質が多用されることになった結果生じている、薬剤耐性菌の蔓延という現象である。

本学位申請論文は、人類学的視点に基づいた優れたベトナム地域研究のひとつとして高く評価できる。とりわけ、家屋敷あるいは世帯を単位として形成され、そこにおいて人間と動植物の相互作用が営まれる小規模なドムス複合体が、歴史の変容を遂げつつも、農民たちにとって不可欠の生きていく空間を提供してきたことを、フィールドワークと文献調査の両方に依拠しながら、具体的かつ実証的に解明したことには、おおきな意義がある。また、今日的な開発や発展の結果として、こうした農村地域が、薬剤耐性菌という新しい生き物の浸透に直面していることを明らかにし、警鐘を鳴らすとともに、解決策の可能性を提示したことも注目に値する。これは、著者自身が参加した、文理協同の研究プロジェクトの成果でもある。

本学位申請論文には、調査研究の結果得られた知見を、ベトナム地域研究という枠組みを超えて、広く生態人類学や医療人類学、さらにはグローバルヘルスやワンヘルスの課題として位置付けようとする視点がやや弱いという弱点がある。こうした弱点が改善されたなら、本論文の学術的意義は、さらに一層高いものになるだろう。しかし、本論文は、これまで述べてきたように、その弱点を補って余りある強みをすでに有している。以上のことから、三名の論文審査担当者は、本学位申請論文は、論文博士の学位(人間科学)を授与するのにふさわしいと、全員一致で判定した。